

父親の子育てに関する一考察

— 30代・40代の父親の子育て状況と母親の意識 —

研究開発室 宮木 由貴子

—要旨—

- ① 今日、厚生労働省や企業等の施策により、父親の育てへの積極的な関与が推進されている。これらの動きも手伝って、子育てをする男性のイメージや意識は大きく変化してきたが、男性の育児休業取得率は未だ低い。
- ② 子どもの世話について個々の内容ごとに父親の実施状況をみたところ、内容によってその実施率は低くないものの、全般的に「非常によくしている（した）」の回答はそれほど多いとはいえず、「時々している（した）」という回答が多い。また、入園・卒園式や運動会などのイベント性の高いものへの父親の積極的な参加は認められる一方で、PTA 活動や保護者会などへの参加は多くない。
- ③ 日本では就労時間の長さや子育てに対する男女の認識差などの要因により、夫婦間での子育てに関与や負担における不均衡感がある。母親から見た父親の子育てに対する満足度は父親から見た母親の子育てに対する満足度より低い。今後の父親の子育てのあり方については、育児休業取得や母親の作業代替的な子育てのほか、より日本社会や個々の家庭に合わせた方策を模索する必要があると考えられる。

1. 研究の背景と目的

1999年、厚生労働省が「子育てしない男を、父とは呼ばない」というキャッチフレーズを打ち出した。それから15年、現在では「イクメンプロジェクト」を始めとする、男性の育児休業取得推進など、男性が積極的に子育てにかかわることを推進する活動や意識改革が官民において進められている。

こうした流れを受け、今日、子育てをする男性（通称「イクメン」）が増加しているとされる。実際に、共働き世帯の増加に伴い男性が家事労働に関与する必然性が高まり、従来女性が担うことが多かった子育てにかかわる男性も珍しくなくなった。また、父親がベビーカーや抱っこひもを使って子どもと2人で外出することもごく当たり前の光景となるなど、男性が子育てにかかわることについての社会的イメージも大きく変化した。デザインや機能などの面で男性に合わせて作られた子育て用品も見られる。しかし、男性の育児休業取得率をみると、その値は2%足らずにとどまっている。

例えば、専業主婦の社会的評価が高くないフランスでは、ある程度以上の水準の教育を受けた女性が就労するのは当然とされる。加えてフランスでは男性の労働時間も日本ほど長くないため、フランスにおいて子どものいる世帯では、父親が積極的に子育てを行うケースが日本より多い。このスタイルは1970年代には既に一般的となっており、当時子育てする父親は「めんどりパパ (papa poule)」と呼ばれた。いわゆる日本でいう「イクメン」と同義であるにとらえると、その言葉の出現時期の違いから日本での動きの遅さがわかる。

男性が子育てに積極的に関与する動きがようやく見えつつある日本だが、総務省の労働力調査をみても長時間労働者が依然として多いなど、諸外国にくらべて日本人男性の労働時間が長い状況は以前とそれほど変わっておらず、日本と諸外国ではその就労環境に大きな違いがある。従って、単純に日本人男性が家事や子育てに「かかわらなかつた」と結論付けることは難しい。事実、多忙により子育てに「かかわれなかつた」側面を主張する人が少なくない点については、中央調査社「父親の子育て参加に関する世論調査」(2012) などでも指摘されている。これに対し、労働環境の見直しなどの対策の必要性も求められているが、これらの状況は徐々に変化していくことは期待できても直ちに改善されるものではないだろう。

こうした中、実際に日本において、父親たちは具体的にどのように子育てにかかわっており、母親たちはそれをどのようにとらえているのかについて、小学生以下の子どもを持つ30代・40代の父親とその配偶者を対象にアンケート調査を実施し、その実態と意識についてたずねた。調査の概要と主な属性については図表1のとおりである。さらに、小学生の子どもを持つ父親にヒアリング調査も実施した。

図表1 調査概要と主な属性

[調査概要]

- 調査対象: 1都3県(東京・神奈川・埼玉・千葉)に在住で小学生以下の子ども(長子)を持つ男性694名とその妻のうち協力を受諾した女性490名
- 調査方法: クロス・マーケティング社のモニターを用いたインターネット調査
- 調査時期: 2013年10月

[主な属性]

父親		人	%	母親(回答者の妻)		人	%
年代	30代	313	45.1	年代	20代	14	2.9
	40代	381	54.9		30代	251	51.2
居住地	東京	268	38.6		40代	220	44.9
	神奈川	173	24.9		50代	5	1.0
	埼玉	133	19.2	職業	正社員・公務員・団体職員	134	27.3
	千葉	120	17.3		パート・アルバイト・派遣社員・内職	88	18.0
長子の性・年齢	男児	未就学	125		18.0	専業主婦	247
		小学校低学年	113	16.3	無回答	21	4.3
		小学校高学年	114	16.4			
	女児	未就学	120	17.3			
		小学校低学年	116	16.7			
	小学校高学年	106	15.3				

2. 父親の子育て行動の実態

(1) 子育て行動の状況

現代の父親は具体的にどのような行動でどの程度子育て（長子に対して）に関与しているのか（したのか）、家庭における様々なシーンごとに、「非常によくしている（した）」と「時々している（した）」と回答した割合を示したものが図表2である。

まず、授乳や食事の介助についてみると、「日中の授乳補助」については全体で50.0%が実施しているが、「非常によくしている（した）」とする割合は14.5%である。一方、「夜中の授乳補助」になるとその割合は両者の合計で42.5%に下がる。「子どもの食事の介助」については54.4%が実施しているものの、「非常によくしている（した）」の割合は16.2%である。

続いて排泄介助についてみると、「子どものオムツがえ」については、排尿時・排便時ともに「非常によくしている（した）」は19.9%で、「時々している（した）」の合計値でそれぞれ57.8%、55.5%となった。「子どものトイレ介助」についてもほぼ同程度の関与がみられる。

また、「一人で入浴できない子どもの入浴介助」については調査項目の中で最も関与の度合いが高く、「非常によくしている（した）」で3割を超え、「時々している（した）」を加えると67.3%だった。着替えの介助については合計で58.2%であるものの、「非常によくしている（した）」とする割合は16.1%にとどまった。

「子どもの寝かしつけ」についても合計では48.4%を占めるが、「非常によくしている（した）」については17.0%だった。しかし夜泣きや排泄といった就寝中の対応についてはその割合は大きく下がり、主に母親にゆだねられている様子がわかる。

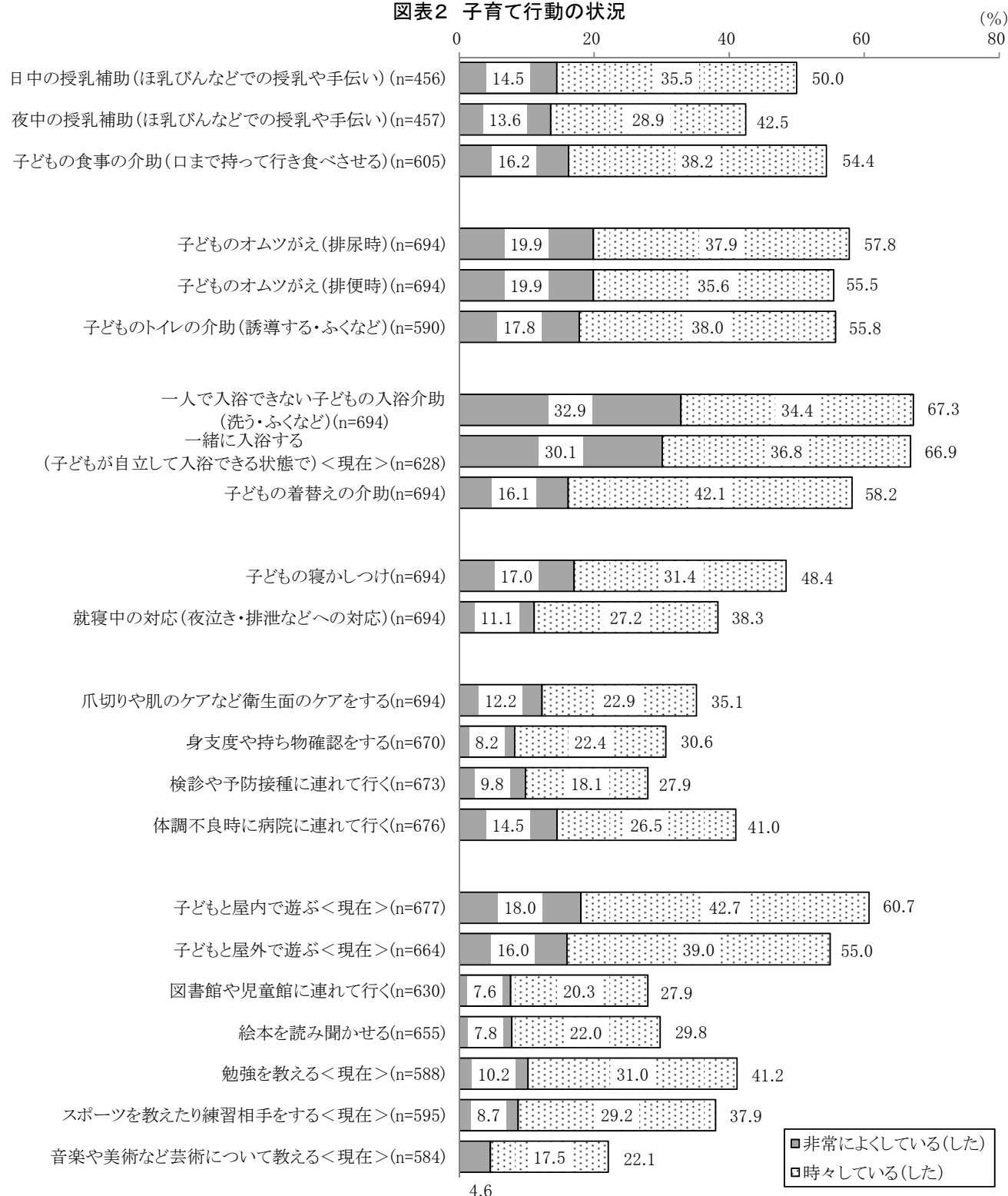
身の回りのケアや検診等の対応については、特に父親が担っている割合が低く、これらも母親主導で対応されていることがうかがえた。

遊びや学習についてみると、「子どもと遊ぶ」は、「非常によくしている（した）」と「時々している（した）」の合計で入浴介助に続いて多いが、ここでも多くを占めたのは「時々している（した）」であり、「非常によくしている（した）」は2割に満たなかった。「絵本を読み聞かせる」や「勉強を教える」「スポーツを教えたり練習相手をする」「音楽や美術など芸術について教える」などの学習支援については全体的にあまり実施されているとはいえなかった。

これらの結果から、「非常によくしている（した）」と「時々している（した）」の合計値をみれば父親が子育てに関与しているとの解釈もできなくないが、全体的に「時々している（した）」との回答が多いことが指摘できる。

父親の積極的な子育て参加を推奨するNPO法人「ファザーリング・ジャパン」創設者の安藤哲也氏へのヒアリングでは、父親の子育て実施状況について考える場合には、子育て行動の具体的な内容もとらえる必要性があるとの指摘がなされた。

図表2 子育て行動の状況



注1:右端の数値は「非常によくしている(した)」と「時々している(した)」の合計値

注2:それぞれの母数は、「該当しない(子どもがまだその対象ではない、必要ないなど)」を除いた数値となっている

注3:授乳についての設問は、母乳子育ての場合は非該当としている

注4:〈現在〉とあるものについては、「現在の状況に限ってお答えください」と付記してたずねたものである。

例えば入浴についてみると、家に母子しかいない状況で乳児の入浴を行う場合、母親は子どもの衣服を脱がせて排泄物の処理をし、自らの入浴もままならない状況で子どもを入浴させ、その後のケアや着衣までも自分で行うこととなる。対して父親が入浴させる場合は母親が在宅しているケースが多く、先に父親が入浴して受け入れ態勢が整ったところで母親が浴室に子どもを連れて行き、入浴後はまた母親が受け取って拭いて服を着せる形態をとることが多い。これをもって父親が「入浴担当」というには、父母間での捉え方があまりに異なるのである。本調査では、父親における入浴介助の実施率が比較的高かったが、内容面を詳細にみるとこうした実態が垣間見えるのである。入浴介助のみならず、子育てにかかわる父親の行動が母親によるサポートを前提とするなど、男女間での育児行動の包括範囲が異なるケースが散見される。

このように、実施率からみても内容面からみても、男性の子育て関与が「母親の子育て」のサポートという位置づけであるケースは少なくない。

(2) 子ども関連のイベント参加状況

続いて子ども関連のイベントへの父親の参加状況についてみる。今回の調査対象者は小学生以下の子どもがいる親なので、妊婦検診から小学校行事までに焦点をあてた実態を概観する。

父親における妊婦検診への同行と出産の立会い状況についてみると、妊婦検診については「自分が行きたいので行った」とする割合が47.9%となっており、「行きたくないが行かざるをえなかった」(12.0%)とする人を加えるとほぼ6割が同行した経験を持つ(図表3)。一方、出産の立会いについては自らの意思で同行した男性は61.8%、「行きたくないが行かざるを得なかった」とする人が9.2%で、7割以上が立会ったとの回答を得た。

また、幼稚園・保育園の入園式・卒園式、小学校の入学式についてみると、いずれも8割の男性が自らの意思で参加していることが確認された。

自発的参加の割合が最も高かったのが「運動会のようなスポーツ系イベント」であり、85.5%が「自分が行きたいので行った」と回答している。これに対し、「学芸会・音楽祭・展覧会のような文化系のイベント」については、スポーツ系イベントと比べると自発的な参加率が若干低くなっている。

「授業参観」「習い事やクラブ・サークル活動関連のイベント」については6割以上の自発的参加が見られるが、「保護者会」「PTA活動や役員活動」については参加率が非常に低い。さらに、保護者会については2割の参加が見られるものの、PTA活動や役員活動になると9.0%にとどまり、「保護者会」については約4割、「PTA活動や役員活動」については過半数が自分は「行く必要がなかった」と認識していることが確認された。

図表3 子ども関連のイベント参加状況

(単位:%)

	行った	自分が行きたいので	行きたくないが 行かざるをえなかつた	行きたかったが 行かれなかった	行きたくないので 行かなかった	行く必要がなかった
妊婦検診(n=657)	47.9	12.0	10.4	5.9	23.7	
出産の立会い(n=665)	61.8	9.2	14.7	6.9	7.4	
幼稚園・保育園の入園式(n=570)	80.9	5.4	8.9	1.6	3.2	
幼稚園・保育園の卒園式(n=480)	79.6	6.3	9.2	1.3	3.8	
小学校の入学式(n=467)	79.2	5.1	10.1	1.5	4.1	
園や学校の運動会のようなスポーツ系イベント(n=588)	85.5	7.3	3.9	1.4	1.9	
園や学校の学芸会・音楽祭・展覧会のような文化系イベント(n=555)	77.7	8.3	8.8	2.0	3.2	
子どもの習い事やクラブ・サークル活動関連のイベント (練習、試合、対戦、コンクールなど)(n=467)	60.2	8.8	10.9	4.3	15.8	
園や学校の活動参観・授業参観(n=562)	66.9	9.4	11.9	3.7	8.0	
園や学校の保護者会(n=556)	20.9	9.2	16.5	14.0	39.4	
小学校のPTA活動や役員活動(n=435)	9.0	11.7	10.1	17.9	51.3	

注1:各項目における非該当者は除外して集計

注2:「出産の立会い」については実際に出産自体に立ち会った割合というより出産に同行したと解釈するのが妥当である

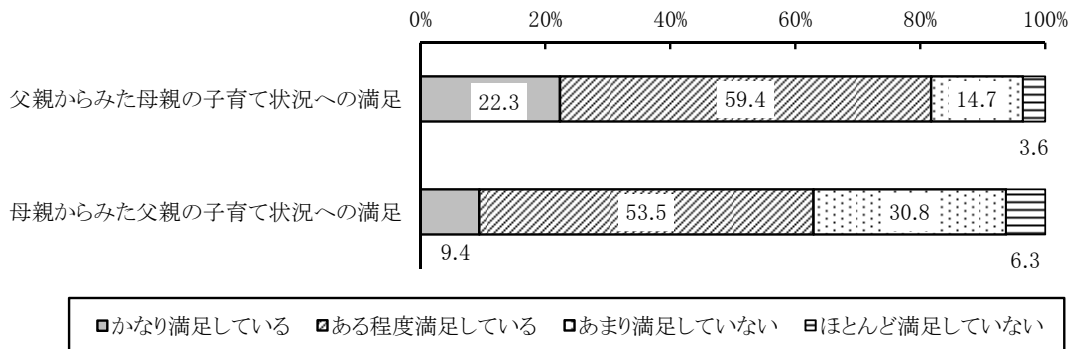
3. 子育てに対する父母間ギャップ

(1) 配偶者の子育て状況に関する満足度

こうした中で、父親からみた母親の、母親からみた父親の子育て状況への満足度はどのようなものなのだろうか。「あなたは奥様（旦那様）の子育て状況についてどの程度満足していますか」と尋ねた結果についてみると、父親は母親の子育て状況について22.3%が「かなり満足している」と回答しており、これに「ある程度満足している」の59.4%を加えると81.7%が「満足している」と回答している（図表4）。一方で母親からみた父親の子育て状況について「かなり満足している」とする人は9.4%にとどまっており、「ある程度満足している」の53.5%を加えても、62.9%という結果となった。母親の4割弱は父親の子育て状況に満足しておらず、相互の子育て状況に関する満足度として約20ポイントの差がある。

母親の職業別にみると、父親からみた母親の子育て状況への満足度は、母親が専業主婦か正社員かで差はない（図表省略）。すなわち、平日に子どもと接する時間が長い専業主婦（母親）の子育て状況に対する父親の満足度が、子どもと接する時間が短縮される正社員（母親）より高いという結果は認められなかった。一方、母親からみた父親の子育て状況への満足度も母親が正社員か専業主婦かの別で大きな差はなかった（図表省略）。すなわち、正社員（母親）の夫（父親）が専業主婦（母親）の夫（父親）よりも満足度が高いということではない。なお、子育てストレスについては有職女性より専業主婦で高いことが確認されている（図表省略）。

図表4 配偶者の子育てに対する満足度



(2) 子育て実施に対する父母間の認識

それでは、母親は父親に対してどのような形での子育て関与を求めているのだろうか。父親に対して実施したヒアリングにおいて目立っていたのが、「自分ではできる範囲でやっていると思うのに、妻はそれを認めてくれない」という意見の多さだった。図表2で示したように、「時々している（した）」というものを含めると、いくつかの子育て項目はかなりの割合で父親が実施しており、父親側はそれらを「子育てをしている（した）」としてとらえている。しかし母親の立場からみると、「時々している（した）」という単発的なものについては、「している（した）」という認識ではとらえられていないケースが多い可能性がある。

加えて、入浴介助の例で既述したように、男性の子育てが「母親の子育て」のサポートに留まっているケースは少なくない。そうした状況を認識せず、「イクメン」を自称する男性に対し、かえって配偶者の子育てに対する満足度が下がるとする女性の声も聞かれる。父親のイベント参加状況についても、父親は保護者会やPTA活動について「行く必要がなかった」と認識しているが、母親側がその「必要性」をどのように認識しているかは定かでない。

4. まとめ

こうした中で、父親はどのように子育てに関与すべきなのか。母親の自由回答で散見されたのは「夫にもっと子育てに関心をもってほしい」「父親としての責任を感じてほしい」との意見である。母親が子育てにおいて父親に求めるのは、単なる労働力としての関与のみでなく、子どもについて共に関心を持って考える「同士」であるケースが少なくない。母親がいわゆる「ママ友」を求めて集う場合に、子育てにおける悩みや迷いを共感できる相手を求めていることが多い。自分と同等の立場で我が子のことを思える配偶者（すなわち父親）に、その役割を期待するのは当然のことである。

実際、母親側からみれば、父親が子育てをできるとき・したいときだけ行うのでは、子育てにおける労働力として父親をローテーションに組み込みにくいという事情があ

る。それでも男性ができる範囲で子育てに関与する意義はある。それは単に母親の物理的負担を軽減するという側面のみならず、父親が「子育てに積極的に関与する意思がある」こと自体を母親に示す意味においてである。場合によっては、週に数度行う子どもの入浴介助より子どもについて母親と真剣にコミュニケーションをとることが、父親における重要な「子育て」であるケースは少なくない。子育てにおいては、物理的な労働力提供とは別に、母親や子どもに対する「関心」が重要なキーワードとなる。この関心の欠如（もしくは関心の表現の欠如）が、「自分（父親）はできる範囲でやっていると思うのに、妻（母親）はそれを認めてくれない」という認識ギャップの発生の一因となっていると思われる。

今回の調査から、日々のゆとり時間（ふだんの生活において、仕事や家事、育児など以外に好きなことをする時間）について父親と母親の状況をみると、平日は母親より父親の方が少ない一方で、休日は父親より母親の方が少ない（平日：父親 1.9 時間／母親 3.41 時間、休日：父親 4.13 時間／母親 3.38 時間）（図表省略）。にもかかわらず、長子に使う時間は、平日・休日にかかわらず女性が男性を大きく上回っている（平日：男性 1.26 時間／女性 4.65 時間、休日：男性 4.34 時間／女性 6.09 時間）。これは、例えば休日に集中する形で、積極的に子育てに関与できる父親がいる可能性を示す。特に図表 2 で見られたように、学習支援などの現状で実行率の低い項目で休日に関与できるものは少なくない。

父親と母親は相互代替ができない面が多々ある。これは、父親が母親の子育てを代替することに限界があるということではなく、むしろ父親ならではの子育ての形があると考えられる。加えて、就労環境等、改善すべき点は多いものの、それでも諸外国と異なる日本社会の特徴や傾向がある。例えば、平成 24 年の「男女共同参画社会に関する調査」（内閣府）をみても、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであるか」の回答において、「賛成」の割合が 51.6%（「賛成」＋「どちらかといえば賛成」）を占めているのが現在の日本である。しばしば比較の対象となるフランスなどの諸外国とは、根底にある部分からして異なるのである。

こうした中、育児休業取得率や子育ての実施率のような数値として表れるもののほかに、各家庭や社会の実態を把握した上でそれぞれに適した父親の子育て形態を模索する必要があると考えられる。まずは父親と母親がきちんと向き合ってコミュニケーションを重ね、自分の家庭の子育てについて共通の意識を持つことが、日本における父親の子育て関与の大きな一歩となるのではないだろうか。

（研究開発室 上席主任研究員）

【参考文献】

- ・ 浅野素女, 2007, 『フランス父親事情』築地書館.
- ・ 内閣府, 2013, 「男女共同参画社会に関する調査」.
- ・ 中央調査社, 2012, 「父親の子育て参加に関する世論調査」.